

グリーン四国

四国森林管理局



高知市丸ノ内1丁目3-30
TEL 088 - 821 - 2000 四国山の日
FAX 088 - 821 - 4834
ホームページアドレス <http://www.shikoku.kokuyurin.go.jp>
電子メール shikoku_soumu@rinya.maff.go.jp

No.1062 2008年9月号

四国の森づくり子どもサミットを開催

四国4県から8校が参加し、各学校の活動報告や森林環境教育の推進に向けての意見交換等を行いました。

(関連記事は2頁へ掲載)



学校が取り組んでいる活動報告の様子



意見のとりまとめの様子



水生昆虫や魚の採取の様子



「グリーン四国」に使われている紙は、日本の森林を育てるために間伐材を積極的に使用しています。



環境に配慮した植物性大豆油インキを使用しています。

「日本の木を使っていく」「きれいな川のために森を大切にする」等の子どもからの意見

「四国の森林づくり子どもサミット」を開催

〈指導普及課・ふれあいセンター〉

八月二十六、二十七日の両日、四万十市西土佐の四万十楽舎を会場に、「四国の森林づくり子どもサミット」を開催しました。

サミットには、四国四県の小学校五校、中学校二校、高校一校から、三十五名の児童・生徒と十三名の先生が参加しました。

この取組は、平成十八年度より選定、表彰している「四国山の日賞」のうち、これまで



参加した各学校同士の交流

で森林環境教育分野を受賞した学校や森林環境教育、活動に積極的に取り組んでいる学校等を対象に、各学校が取り組んでいる活動報告や、今回のサミット開催に合わせて、ふれあいセンターが作成した学習教科補完プログラムの実践活動、森林環境教育の推進に向けた意見交換を行うとともに、子どもの視点からみた四国の森林づくりへの提言についての検討を行いました。サミット初日は、各校から



活動報告の様子

の活動報告に始まり、土壌に棲む生物観察、立木の炭素現存量調査を二グループに分かれて学習活動を行いました。子どもたちは、今まで観たことのない昆虫の生態に驚きながらも、昆虫が果たしている役割の話に真剣に耳を傾けていました。また、炭素現存量調査では、悪戦苦闘しながらも一本の木が貯蔵している二酸化炭素量を算出し、その量の多さに驚いていました。

二日目は、四万十川の支流「北ノ川」で水生昆虫の採取・観察を行いました。網を使って自ら採った昆虫や魚などを観察しながら、日本最後の清流と言われる四万十川の生物



魚等の水の生物の説明



進行役の小林修先生による意見交換会

種の豊かさや、名前の由来などに感心していました。

その後、四万十楽舎に場所を移し、森林環境教育の推進に向けた意見交換、四国の森林づくりの提言についての検討を行いました。

意見交換会は、愛媛大学農学部森林教育特任講師の小林修氏がコーディネイトし、子どもたちに「みんなが考える森林とは、どんな森林ですか」「森林の中でやってみたい活動や体験は何ですか」の質問に、日頃、思い描いている森林の姿や体験してみたいと考えている遊びや活動を紙に書き、それを模造紙に貼り付けてい

きました。

最後に、「みんなが考えている森林を育て、守っていくために、今日からできることは」の問いに、「日本の木を使っていく」「植樹や下草刈りに参加する」「動物たちの棲みやすい環境のため、ゴミを捨てない」「きれいな川のために森林を大切にする」などの意見が出されました。

四国森林管理局では、子どもたちによる意見等を基に、近日中に、子どもたちによる「四国の森林づくりへの提言」としてまとめ、公表していくとともに、来年度の業務に反映していきます。



意見交換会でのとりまとめの様子

国有林防災ボランティア協定を締結

〈治山課〉

近年、国民の防災ボランティア活動への関心は一層高まりを見せており、個人や団体がそれぞれの能力や特性を活かし、災害被害の軽減に向けた社会貢献活動に取り組み事例が増えています。

一方、集中豪雨等による山地災害の多発化・激甚化、大規模地震発生等の危険性等が指摘されており、国有林野においても引き続き大規模災害による被害の発生が懸念されています。

こうした中で、国有林野内で発生した山地災害等の情報を収集する際に地域の森林土木技術者等をボランティアとして活用し、より迅速かつ円滑な災害対



調印式の様子



協定書を手にする左：山中会長 右：中山局長

策の実施及び地域住民の意識の向上を図ることを目的として、国有林防災ボランティア制度が創設されました。

これを受け、当局においても国有林防災ボランティアの受け入れ体制を整備することとし、本制度に関する協定の相手方を一般公募により募っていました。八月二十五日に「四国森林管理局における国有林防災ボランティア制度に関する協定」を（社）高知林業土木協会（山中巨司会長）との間で締結しました。同協会は、四国四県から約三五〇名の国有林防災ボランティアを登録する予定であり、当局及び各森林管理署等と連携を図りつつ、その経験や知識を活かして、国有林野内における災害発生に関し迅速な情報収集活動を展開することとしています。

「第一回国有林モニター勉強会」を開催

〈企画調整室〉

八月二十一日、徳島森林管理署管内の名頃谷山国有林などにて、本年度「第一回国有林モニター勉強会」を開催しました。当日は時折小雨の降るなか、四国四県から国有林モニター十名の方が参加しました。

まず、現場へ向かうバスの中で、徳島森林管理署長から徳島森林管理署の概要について、その後、標高一、三〇〇m付近の天然林内で、四国森林管理局計画課経営計画第一係長から天然林や緑の回廊についての基本的な説明を行いました。

さらに、緑の回廊内の動植物の生息状況等を把握するためのモニタリング調査に携った金澤



天然林や緑の回廊についての説明



モニタリング調査での使用機材の説明

文吾氏（特定非営利活動法人四国自然史科学研究所センター理事）から、ツキノワグマが緑の回廊を活動域としており、ツキノワグマの生息地保護に果たす緑の回廊の役割等について話がありました。参加者は、ツキノワグマ（ヌス）に付けていた調査用の発信機付き首輪を実際に自分の首に巻いてみて「首周りが細いねえ。」と美感し、「ツキノワグマの冬眠場所は毎年同じなのか。」といった質問をし、「そうとも限らないようだ。」との講師の説明に熱心に耳を傾けていました。

その後、民有林内で徳島森林管理署が実施している治山工事を見学し、徳島森林管理署治山

課長から、当該工事には、現地にある種子を採取し吹き付けて元の植生に戻す工法を採用しており、発生した植生により法面（のりめん）保護効果が見られるものの、カモシカと見られる害害があり、標高も高いことから、森林への移行が低地に比べ遅くなりがちである、などの説明がありました。治山工事により早期に森林に戻す重要性やその困難さについて、実際に現場を見ることで、より実感できました。

最後にモニターの方々からは、「国有林の緑の回廊や治山工事等の取組について、もっとPRすべき。」といった声が寄せられました。勉強会で寄せられた意見は、今後の取組の参考にしていくこととしています。



治山工事实行箇所での説明